

市島春城旧蔵『異疾草紙』が東北大学附属図書館医学分館 所蔵になるまで

渡邊 愛子

1. はじめに

東北大学附属図書館医学分館（以下当館）は、蔵書約44万冊の医学の専門図書館である。最新の医学情報の収集はもちろんだが、蔵書には「解体新書」など医書を中心に古典籍も含まれている。東日本大震災後に寄贈された資料もあり、平成28（2016）年度よりこれら古典籍資料の再整理を行っている。その際、山形名誉教授寄贈資料から、『異疾草紙』が再発見された。

後段で紹介するように帙に書かれた藤浪剛一の識語から、この『異疾草紙』は市島春城が所蔵していたことがわかり、あわせて題箋には市島春城の「珍」の印が押されている¹。このことから、資料的価値が高いだろう、という推測をたて、調査を開始した。取書家として知られた市島春城の旧蔵本であることから、以下「市島本」と仮称する。山形、藤浪、市島以外の旧蔵者を明らかにするとともに、資料の位置づけを確認したい。

まず、書誌的事項を確認する。

異疾草紙

弘化4年（1847）写 彩色

21丁 26.5×19.8cm 1帙1冊

薄く光沢のある料紙が使われている。絵巻物の模本であるが、1画面が見開きに展開できるように制作されているため、最初から折本にすることを想定していたと考えられる。詞書と全17画面で構成され、いずれも病気の人々が描かれている。

まず、「日本古典籍総合目録データベース」²を検索した。漢字形ではヒットしない。「いしつそうし」で検索してみると統一書名「病草紙（やまいのそうし）」の書誌が検索できた。リンクしていた九州大学の所蔵『異疾草子』の画像³から、市島本は、九大本と同系統の資料の写本であり、『異疾草紙』は「病草紙」写本であると確定した。

2. 旧蔵者を探る

市島本には奥書が2筆、蔵書印は題箋を含め8種9個、帙裏に藤浪剛一の識語がある。ここから、旧蔵者を探る。奥書と蔵書印の位置は図1のようになっているが、判明した年代の新しい所蔵者から見ていきたい。

1) 山形徹一〔蔵書印⑧〕

山形徹一東北大学名誉教授（以下「山形先生」）は平成10（1998）年9月14日に85歳で亡くなった（1913-1998）。昭和35（1960）年から東北大学病院第三内科の

教授を務め、胃の集団検診の確立に尽力した。また、アララギ派の歌人としても知られる⁴。

蔵書は、遺族により仙台文学館に寄贈されたが、山形先生の遺志により2点だけ東北大学に寄贈された。それが『樗牛全集』と『異疾草紙』である。『樗牛全集』は東北大学記念資料室（現：史料館）、『異疾草紙』は当館に寄贈された。この寄贈のいきさつと『異疾草紙』の紹介を石井敏弘名誉教授が「良陵新聞」⁵に紹介（以下「石井記事」）している。

1 吉田春太郎、春城清玩聚散記（下）、日本古書通信、1957.7,159,p3-5.

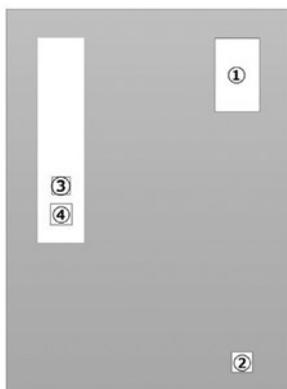
2 国文学研究資料館、日本古典籍総合目録データベース、<https://base1.nijl.ac.jp/~tkoten/>（参照：2019.1.8）

3 異疾草子（九州大学附属中央図書館 支子文庫本）、新日本古典籍総合データベース、<https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/100076619/viewer/1>（参照：2019.1.8）

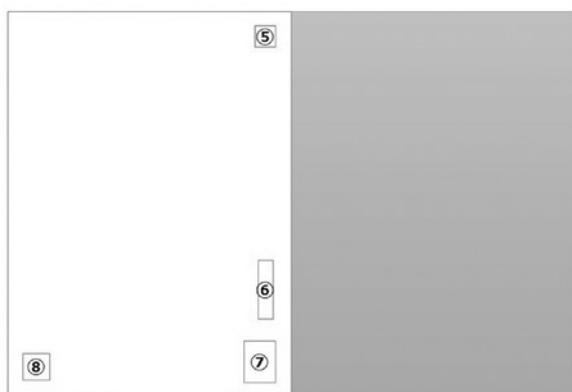
4 山形徹一さん死去、河北新報本紙（朝刊）、1998.9.15.

5 石井敏弘、故山形名誉教授の寄贈書二点『樗牛全集』と『異疾草紙』、良陵新聞、1999,215,p7.

表紙



第一丁オ



第21丁ウ 裏表紙

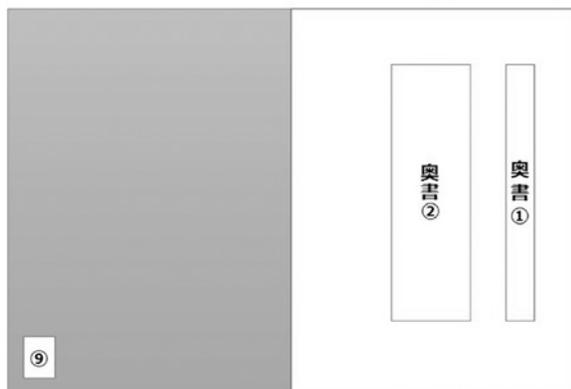


図1 蔵書印の押印位置

図2の蔵書印は正方形の印で「山形氏蔵」とある。山形名誉教授寄贈資料には、他に「山形蔵書」の長方形の印が確認できる。



図2 ⑧山形氏蔵

帙裏 蓋がわの裏

2) 藤浪剛一 [蔵書印①⑥⁶ 識語①]

石井記事が紹介しているように、図3の帙裏に書かれた識語から、市島本は、藤浪剛一から山形先生へ昭和14(1939)年11月に譲渡されたことがわかる。識語は以下のように言う。

山形學兄に贈る此模寫決して善きものに非らざるも市島春城氏の愛藏せしもの殊に旧藏者雨宮氏の藏印に於ては讀書子の服膺すべき警句である

昭和十四年秋十一月講義終了の日

藤浪剛一

「講義終了の日」とあるように、昭和14年には藤浪の講演が行われているが、後段で詳しく述べる。

藤浪剛一(1880-1942)は、レントゲン学の第一人者として知られる慶應大学の教授であった。また温泉学の研究者、掃苔家としても知られる。医史学の研究にも関わり、富士川游(1865-1940)とともに、日本医史学会を設立した。藤浪の没後、「乾々齋蔵書目録」⁷が夫人によって刊行されている。ここに記載された約7,000

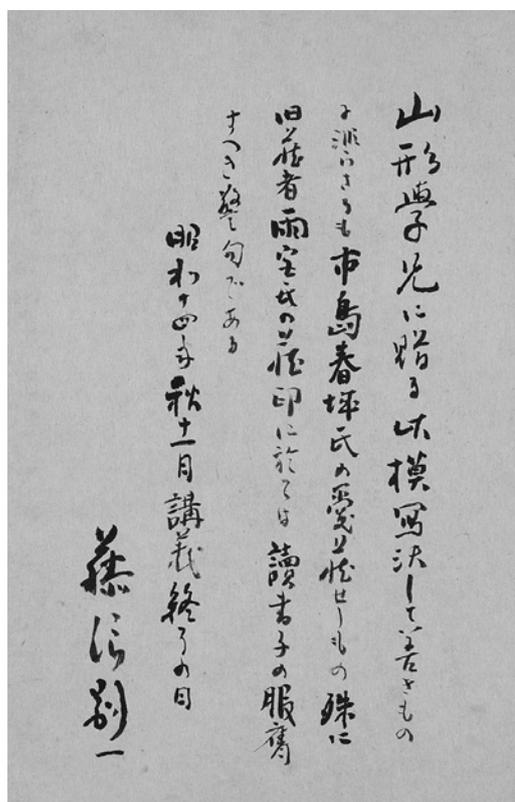


図3 識語① 藤浪剛一

6 藤浪剛一. 渡辺守邦, 後藤憲二編. 新編蔵書印譜. 増訂, 青裳堂書店, 2014, p883, (日本書史学大系, 103). 下.

7 藤浪和子. 乾々齋架蔵和書目録. 1943, 506p.



図4 ⑥藤浪氏蔵

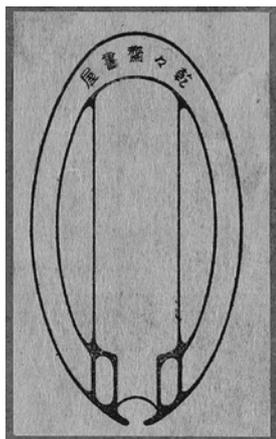


図5 ①蔵書票 乾々齋書屋

冊が、没後まもなく杏雨書屋（現：武田科学振興財団杏雨書屋）へ寄贈された^{8,9}。

印文は図4「藤浪氏蔵」と図5「乾々齋書屋」。乾々齋書屋は和紙に押したものが蔵書票として貼付けてある。

3) 市島春城 [蔵書印②③④¹⁰]

市島謙吉（1860-1944）は新潟県出身，ジャーナリスト，国会議員として活動をした。春城と号した。病気により政治活動は引退を決意したが，翌明治35（1902）年に早稲田大学図書館初代図書館長となった。その後も日本文庫協会（現：日本図書館協会）会長，国書刊行会での古書の復刻刊行，随筆執筆活動など多方面に活躍した¹¹。

春城は，早大図書館長に就任した頃から古書を収集し始めたといわれる。春城はそのことを以下のように語る。

四十一二の頃大患に罹り，病後早大の図書館経営に當ることになってから，保養かたがた毎日毎日圖書漁りをやり出して十数年繼續しました，館に備へるための圖書漁りもやりましたが，自家一身の圖書蒐集にも没頭しました。本来好きな事ですから，これが何よりも面白く，病患がそれがために平癒したやうに思ひます¹²。

書籍の購入の記録もいくつかの書帖に残されている。早稲田大学図書館古典籍総合データベースで公開されている「小精廬購書歴」¹³（以下「購書歴」）は，大正11（1922）年から昭和2（1927）年の書籍の購入履歴が記されている。「購書歴」の画像をたどっていくと，大正13（1924）年10月19日入の記録が見つかる。

異病草紙 一 写本藤原 十円

欄外には「珍」と筆書きされている。

同じ日の日記「小精廬日誌」¹⁴には残念ながらこの購書についての記載はない。しかし前日の18日「古池書三来る。書帖代二十円相渡す」22日には「本郷琳瑯閣を訪ふて二三の図書を購入。二十円払入」とある。また，「購書歴」の「異疾草紙」のページの左肩には「一九八，七〇〇」と書き入れがあるので，18日か22日の支払いに関わるだろうと思われる。

春城は蔵書印にも造詣が深く，古印の収集は800種，自用印は100種を超える¹⁵。市島本に押されているのは，3種，「春城清玩」「珍」「癸亥災後所得」である。



図6 ②春城清玩



図7 ③珍



図8 ④癸亥災後所得

図6「春城清玩」は春城の印としてよく知られているもので濱村蔵六（5世，1866-1909）の刻したもの。図7「珍」は「購書歴」の欄外にも押されている。珍書に押印したと考えられる。欄外の「珍」は，単に押印してあるもの，筆書きの「珍」の上から押印してあるものもあるが，「異病草紙」は筆書きのみである。図8「癸亥災後所得」は癸亥災即ち大正12（1923）年9月1日

8 小曾戸洋. 杏雨書屋のコレクション. 杏雨. 2015, 18, p6-11.

9 平松賢二. 杏雨書屋蔵書に押された印影の調査. 杏雨. 2017, 20, p88-115.

10 神野雄二. 市島春城の印章（下）. 修美. 1994, 45, p57-78.

11 藤原秀之. 春城市島謙吉先生と早稲田大学図書館. 早稲田大学図書館紀要, 2010, 57, p96-121.

12 市島謙吉. 文墨餘談. 翰墨同好會, 南有書院, 1935, p97.

13 市島謙吉. 小精廬購書歴. 1922-1927写（自筆）. 67コマ. http://archive.wul.waseda.ac.jp/kosho/i04/i04_01919/i04_01919_0651/i04_01919_0651_p0067.jpg（参照：2019.1.8）

14 市島謙吉. 小精廬日誌. 1923-1939写（自筆）. 31コマ. http://archive.wul.waseda.ac.jp/kosho/i04/i04_01919/i04_01919_0591/i04_01919_0591_p0031.jpg（参照：2019.1.8）

15 同資料10.

の関東大震災後に入手したもの、の意である。「購書歴」には、「大正12年8月29日入」の記載の次の行にこの朱印を押し、「以下震災以後」と記入がある¹⁶。8月29日の次の日付がある記述は12月12日であり、この間、45点ほどの記載がある。

春城は、昭和2(1927)年に蔵書を売立する。

(貨殖の才がなく、余財はすべて書物に換える。よって図書目録は、世間でいうところの貯金帳に等しい。震災後、家の改造に当たって)家内は建築費をどうすると問ふから自分はここに貯金帳があると、取り出して見せたのは圖書目録であって、家内を苦笑せしめたが事実すべての蔵書を売り飛ばして家を改造したのだ¹⁷。

その昭和2年の展覧目録がある¹⁸。10月14日早稲田大隈會館にて展覧が行われ、15、16日に入札が行われた。7,000部を売り立て、51,000円になったという¹⁹。

「展覧目録」107頁に879番として「賀春禧單 山崎美成著」「花あふき 彦磨寫本」と共に「異疾草紙 彩色繪寫本」が掲載されている。

市島本は大正13年10月19日から昭和2年10月まで市島春城の蔵書であったことが確認できた。

4) 雨宮中平 [蔵書印⑦⑨]

春城以前の所有者はおそらく、雨宮氏である。図9第1丁表、図10裏表紙裏の2か所押されている。雨宮氏蔵書印文は石井記事に翻刻されている。

叢書蔵書良非易事 / 蓋觀書者澄神端慮
 淨几焚香勿捲腦勿 / 折角勿以爪侵字勿
 以唾揭幅勿以作枕 / 勿以夾紙隨損隨修
 隨開隨掩則無傷殘 / 雨宮氏蔵書記 (/は改行)

印文そのものは、愛書家の心得、閲覽時の注意事項を掲げたもので、「よい本を集めることは大変なこと。書を見るときは身心を整え、机を掃除して香を焚き、

本を丸めたり、角を折ったり、爪で文章に印をつけたり、指に唾をつけて頁をめくったり、枕にしたり、しおりを挟んだりしてはいけない。やぶれていたら繕い、無理に開いたりしなければ、傷が残ることはない」といったところだろうか。よく知られたところでは、青柳文蔵の「勿折角勿卷腦勿以墨汚勿令鼠齧勿唾幅揭」と似ている。蔵書印データベースによれば、松井羅洲(宝暦元-文政5,1751-1822)の蔵書印²⁰が、ほとんど同じ印文であることがわかる。趙子昂の逸話などがあるのかもしれない。以下に羅洲の印文を示す。

趙子昂云吁聚書藏書良非易事善觀書者滌手焚香扠塵
 淨几勿捲腦勿折角勿以爪侵字勿以唾揭幅勿以夾勿以
 作枕隨損隨修隨開隨掩後之得吾書者并奉贈此法大阪
 臨照堂藏

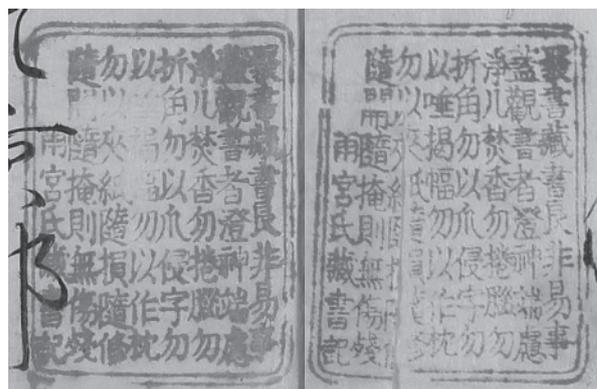


図9 ⑦雨宮印第一丁表

図10 ⑨雨宮印裏表紙裏

いろいろの蔵書印譜を確認したが、雨宮氏印についての記述は見つけられなかった。手掛かりを求めてネット検索をしていると、日本社会事業大学で所蔵されている『安政見聞誌』に、全く同じ印が押されていることがわかった²¹。また、この『安政見聞誌』には、「雨宮中平」の印もある。雨宮中平であれば、幕末から明治にかけ、蕪山代官江川氏の手代として名前がある²²。

さらに、楽善会訓盲院(現:筑波大学附属視覚特別支援学校)が、明治18(1885)年に私設から文部省直轄となる前後の文書「雨宮史料」があることが分かった。

16 同資料13.39コマ。http://archive.wul.waseda.ac.jp/kosho/i04/i04_01919/i04_01919_0651/i04_01919_0651_p0039.jpg (参照:2019.1.8)

17 同資料12,p101.

18 春城市島先生古書籍展覧賣立目録,1927,p107.

19 同資料1.

20 国文学研究資料館,蔵書印データベース,http://dbrec.nijl.ac.jp/CSDB_68861 (参照:2019.1.8)

21 仮名垣魯文編,一勇齋国芳ほか画,安政見聞誌,安政3(1856)年刊,日本社会事業大学デジタルライブラリ,http://opac.jcsw.ac.jp/dl/2004/ansei/view-01.html (参照:2019.1.8)

22 江川文庫編,写真集日本近代化へのまなざし:蕪山代官江川家コレクション,吉川弘文館,2016,p8.

紹介記事²³に掲載の図版には雨宮氏印と同じような印が押してあるように見える。著者に問い合わせ、同じ印文であることが分かった。これでこの印が雨宮中平の蔵書印と確定した。

『安政見聞誌』『雨宮史料』市島本の印を比べると印面の磨滅は市島本が最も激しく、雨宮中平は明治18年以降に市島本を入手したといえよう。

今回判明した雨宮中平の履歴を紹介する。

雨宮氏過去帳によれば、雨宮中平は明治39(1906)年3月17日82歳で亡くなった。旧称新平、維新後、新衛門、中平と名乗ったとある²⁴。

雨宮新平は、葦山代官所江戸役所の手代として活動した。葦山代官江川太郎左衛門が代々記録した「支配御用留」手附手代書役姓名書附には、嘉永2(1849)年から江戸役所手代、として名前がある。最も記述が詳しい元治元(1864)年書附²⁵で職歴を確認する。

手代

一 金拾五両	御鉄砲方附手代世話方助
三人扶持	御普請役格
	雨宮新平

祖父太郎左衛門勤役中天保十一年子年三月書役ニ、召抱、同十四年卯年四月手代ニ取立、父太郎左衛門勤役中、容[ママ(安)]政二卯年五月手代ニ召抱、同年九月御鉄砲方附手代助被仰付、同三辰年十月御普請役格被仰付、御鉄砲方附手代共世話方助被仰渡、文久三亥年正月私手代ニ召抱申候

新平は英龍第36代江川太郎左衛門(享和元-安政2年、1801-1855)時代の天保11(1840)年、没年から逆算すると15歳頃に書役として登用された。書役は手代の研修過程とされる。天保14(1843)年に手代に昇任した。手代は、世襲されることが多かったようである²⁶。「御用留」内には、祖父雨宮茂十郎は江川英毅(明和7年-天保5年、1770-1834)時代の元手代、父茂一郎も英

毅時代の手代との記述がある。

江川文庫と国文学研究資料館が運営する「伊豆葦山江川家文書データベース」(以下江川家DB)²⁷では天保15(1844)年から明治41(1908)年まで雨宮新平、新衛門、新右衛門、中平、貞道²⁸が関連する文書278件が検索できる。雨宮新平が差出・作成者になっている文書は受取覚などが多いので、財務を預かる仕事をしていたのではないと思われる。

英龍没後、新平は英敏(天保10-文久2、1839-1863)、英武(嘉永6-昭和8、1853-1933)の歴代江川太郎左衛門に仕えた。

明治維新後、雨宮新平は、中平と改名した。「官員履歴」²⁹には、明治4(1871)年雨宮中平は46歳と記録されている。この時の肩書は葦山県少属であり、明治2(1869)年10月に任命されている。旧称新衛門とある。同じく経理系の職務であったようで、江川家DBでは英武留学経費などの中平差出文書が検索できる。

明治17(1884)年6月2日、廃官にあたり、江川家から80円を下賜され、中平は江川家を去った³⁰。

翌明治18(1885)年6月頃には善楽会訓盲院庶務掛として勤務していたらしい³¹。『東京盲学校六十年史』³²には旧職員名簿があるのだが、中平の名はない。文部省直轄時に楽善会職員7名は全員が文部省の雇用となった³³が、そのうち旧職員録に名があるのは2名だけで、ごく短期の在籍だったのかもしれない。

伊豆の国市中央図書館郷土資料室にて晩年の中平が新宿御苑の門衛をしていた、とも伺った。江川家DBでは、明治21(1888)年東京南豊嶋第一御領地、明治22(1889)年、23(1890)年に各一通新宿御領地から雨宮中平差出の文書が検索できるが、これらの内容は確認していない。

これだけの堂々たる印文の蔵書印を作成するには、それなりの蔵書を所蔵していたのではないかとと思われるが、これまでのところ、『安政見聞誌』、『雨宮史料』、市島本以外の雨宮中平の蔵書の情報は無い。

23 岸博実、楽善会訓盲院史伝える雨宮中平の所蔵品。(歴史の手ざわり・もっと、48)、点字毎日活字版、2015.1.1、p9.

24 雨宮氏過去帳、御子孫の御好意により、岸博実様から画像を見せていただいた。中平の名は江川英武より下賜と記載されている。

25 葦山町教育委員会、葦山町史、6上、葦山町史刊行委員会、1992、p576.

26 仲田正之、葦山代官江川氏の研究、吉川弘文館、1998、p154-156.

27 江川文庫、国文学研究資料館、伊豆葦山江川家文書データベース、http://base5.nijl.ac.jp/~archicol/egawa_DB_index.htm(参照:2019.1.8)

28 同資料22、雨宮中平肖像写真のキャプションに「(貞道)」とある。

29 “官員履歴(豆)明治元-五年”、明治初期静岡県史料、静岡県史料刊行会編、静岡県立中央図書館蔵文庫、1967、p935.

30 本多晋、口上書(雨宮中平御扶助80円下賜に付)、1884.6.2 江川家文書のうち

31 岸博実、文部省直轄への転換期楽善会の「雨宮史料」。(歴史の手ざわり・もっと、6)、点字毎日活字版、2011.6.30、p4.

32 東京盲学校六十年史、東京盲学校、1935、p467.

33 同資料32 p153.

5) 忠房 [奥書②]

奥書二筆目を書いた忠房、つまり市島本の制作者は誰か。図11左側の奥書二筆目は以下のように記す。

古畫異疾草紙一冊醫官
田澤氏之出蔵再写之以
備覽時弘化丁未年晩秋
上旬日 忠房

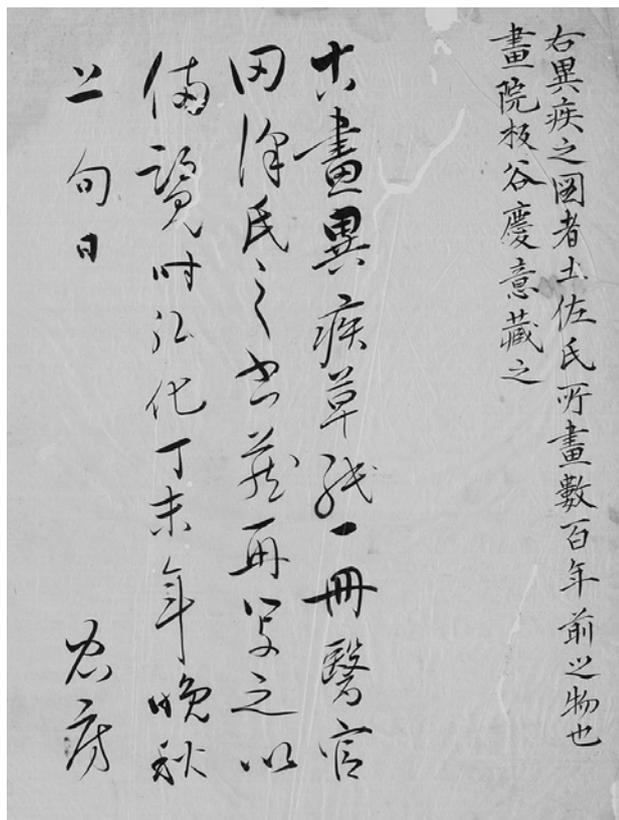


図11 奥書①②

『系図纂要』³⁴で調べる限り、弘化丁未つまり弘化4(1847)年に生存している忠房は、近衛忠房(天保9-明治6, 1838-1873)である。近衛忠房は関白近衛忠熙(文化5-明治31, 1808-1898)の子として生まれ、慶応3(1867)年左大臣となった。公武合体派の公家として幕末史に登場する。ただし、弘化4年では、わずか9歳である。すでに元服していたが³⁵、筆写を命ずること

ができるか、という点に疑問が残る。

忠房が「異疾草紙」を借用した医官田澤氏は田澤仲舒(生年不詳-嘉永3, ?-1850, 70余歳)と考えられる。幕府の医師であり、村田春海の門人の国学者でもあった。その蔵書は「函崎文庫」の蔵書印で知られる^{36,37}。田澤仲舒には「天使日記」がある。現在、国立国会図書館で所蔵されているのは天保年間からの日記³⁸で、多紀氏が創設した医学館で出講した儒学の講義項目や、大塩平八郎の乱、外国船来航などについての巻説と私観、読んだ本の記録はあるが、「病草紙」に関する記述はなかった。

市島本裏表紙裏には「ろくろつくびの鶴」とでも呼びたい鳥が3羽書いてあり、9歳の忠房卿の落書きであったらほほえましい、とも思えるが、『系図纂要』には掲載されていない忠房の可能性も十分あり、別の時期の落書きである可能性もあり、ひとまず不詳とする。

6) 多紀元簡 [奥書①]

市島本の所蔵者の記録は二筆目の奥書までなのだが、資料の位置づけを考えると図11右側の一筆目の奥書は非常に重要である。

右異疾之図者土佐氏所畫數百年前之物也
畫院板谷慶意蔵之

とあるが、全く同じ奥書を持つ資料を国立国会図書館が所蔵³⁹していることがわかった。(以下国会本)

国会本：一筆目の奥書

右異疾之図一卷土佐氏所畫蓋數百年前之物也畫院板谷慶意蔵之予倩姫路画史仲野永舟模写之以蔵テ家云
寛政十二年庚申歳夏四月口八日丹波元簡識聿修堂

国会本の奥書「一卷」に対して、市島本「者」とある、一か所だけの違いである。

国会本は、その奥書により、幕府絵師板谷慶意(広長 宝暦10-文化11, 1760-1814)が所蔵する摸本を、寛

34 系図纂要, 全18巻, 名著出版, 1973-1977.

35 “近衛忠房”. 野島寿三郎編. 公卿人名大事典 普及版. 日外アソシエーツ, 2015, p310.

36 “田澤仲舒”. 石山洋ほか編. 江戸文人辞典 国学者・漢学者・洋学者. 東京堂出版, 1996, p244-245.

37 “田澤宗伯”. 国立国会図書館編. 人と蔵書と蔵書印: 国会図書館所蔵本から. 雄松堂出版, 2002, p127.

38 田澤宗伯. 天使日記. 天保15-嘉永3(1844-1850)写(自筆)[マイクロ資料].

39 疾草紙. 多紀楽春院写, 嘉永7(1854). 国立国会図書館デジタルアーカイブ. <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2540945> (参照: 2019.1.8)

政 12 (1800) 年多紀元簡 (桂山 宝暦 5- 文化 7, 1755-1810) が姫路の絵師仲野永舟に依頼して模写し、さらに二筆目の奥書により、嘉永 7 (1854) 年に子の多紀楽春院 (元堅 寛政 7- 安政 4, 1795-1857) が写したものであるとわかる。富士川游の旧蔵本であり、「富士川家蔵本」の印がある。

多紀氏は、幕府の医官である⁴⁰。多紀元孝 (元禄 8- 明和 3, 1695-1766) は宝暦元 (1751) 年御匙, 翌年奥医師となった。以降代々奥医師を務める。明和 2 (1765) 年, 私設の医学学校「躋寿館」を設立した。子の元恵 (享保 16- 享和元, 1731-1802) はこれを継ぎ, 寛政 3 (1791) 年, 躋寿館は官制の医学館となった。

躋寿館, 医学館を通して, 古医書の収集, 復刊事業が行われた。幕府の紅葉山文庫や, 仁和寺などの所蔵本を底本に翻刻事業が行われた。考証学派の祖といわれる 3 代目元簡も収書に努めた⁴¹。その蔵書印の印文は「白飯充腸聊充肉 好書至手不論銭」⁴²という。医書収集事業の中で目にとまった「病草紙」だったのかもしれない。

模本を書いた仲野永舟は不詳であるが, 姫路城に藩主酒井氏の肖像画等が数点保存されている⁴³。多紀元簡の交友には姫路藩士が何人かあり⁴⁴, その関わりで姫路藩絵師永舟が関与したのであろうか。

また, 国会本の画像と比較することで, 市島本が折本として制作されたことが明確となる。例えば, 4 場面目に描かれる「鼻黒の一家」の場面は, 国会本では紙継ぎ目は詞書きから次の詞書きまでで絵は料紙の中央に描かれている。一方, 市島本では, 図 12 に示すように, 絵が見開きになるように描かれるので, 画面の連続に不自然な部分もある。



図 12 市島本第 4 場面 「鼻黒の一家」

7) 二種華 [蔵書印⑤]

図 13 のこの印だけ, 印主が分からなかった。印文は「二種華」か。押印の位置から, 雨宮氏と春城の間の所蔵者ではないかと思うが, 不明である。



図 13 ⑤二種華

また, 表紙中央に「六十三」の朱書があり, 墨で囲ってあるが, これも不詳である。

ここまでにかつた市島本の伝来をまとめる。幕府絵師板谷氏の所蔵本から, 幕府医官多紀元簡が模本を作成した。同じく医官であり, 医学館に出講していた田澤氏が再写し, さらに忠房が田澤氏函崎文庫本の模本を制作したのが市島本といえる。忠房は近衛忠房の可能性はあるが, 確定できない。忠房が制作した模本は, 雨宮中平, 市島春城, 藤浪剛一, 山形敏一と伝来し, 山形先生から当館に寄贈された。

3. 「病草紙」模本としての位置づけ

伝来が明らかになったところで, 市島本の「病草紙」の模本としての位置づけを考えたい。

「病草紙」は数々の美術全集などで取り上げられお

り, 原作者や, 意味付けなど議論されてきた⁴⁵。それらの研究成果によれば, 「病草紙」原本は「地獄草紙」「餓鬼草紙」と一連の絵巻物として制作され, その制作に

40 森潤三郎. 多紀氏の事蹟. 日本医史学会. 1933, 376p.

41 小曾戸洋. 考証医学の人々とその業績. 杏雨. 2004, 7, p93-107.

42 町泉寿郎. 医学館の軌跡: 考証医学の拠点形成をめぐって. 杏雨. 2004, 7, p35-92.

43 “姫路城所蔵の絵画”. 姫路市史, 14 別編姫路城. 姫路市, 1988, p837-851.

44 同資料 40, p169-175.

45 永井久美子. “文献解題”. 病草紙. 加須屋誠, 山本聡美編. 中央公論美術出版, 2017. 5, p219-223.

は後白河法皇（大治2-建久3,1127-1192）が関わっていたとされる⁴⁶。

絵巻物原本は、後白河法皇に関係のある寺院が所蔵した後、名古屋の大館高門（明和3-天保10,1776-1839）を経て、同じく名古屋の関戸家に伝わった。昭和初期に一場面ずつに切断されて、分蔵された。現在は京都国立博物館などに所蔵されており、国宝、重要文化財に指定されている⁴⁷。「関戸家本」と通称される。

『杏雨書屋所蔵病草紙模本集成』（以下『模本集成』）⁴⁸により、関戸家本19場面の名称と順番を掲げる。現在でも知られる病名も見える。

- ①鼻黒の一家, ②不眠症の女
- ③風病の男, ④小舌の男
- ⑤尿を吐く男, ⑥二形
- ⑦眼病の治療, ⑧齒槽膿漏の男
- ⑨痔瘻の男, ⑩毛虱
- ⑪霍乱の女, ⑫せむしの乞食法師
- ⑬口臭の女, ⑭嗜眠癖の男
- ⑮あざのある女, ⑯白子
- ⑰侏儒,
- ⑱背骨の曲がった男, ⑲肥満の女

大館高門は、①～⑥を所蔵していた。寛政8（1796）年、大館氏は⑯白子を宮廷絵師土佐光貞（元文3-文化3,1738-1806）に贈り、光貞は返礼に⑯白子の模写および自分の所蔵する⑰侏儒を贈った。このとき、光貞により、「病草紙」が土佐光貞画、寂連法師詞書という鑑定書がつけられた。⑱⑲は別の軸ものとして伝来した⁴⁹。

この場面順を市島本に当てはめてみると、以下のような並び順となっている。

⑰⑱⑯①⑥⑤⑬⑪⑩⑨⑦⑧④⑭③⑮②

⑱⑲は含まれていない。同じ構成の模本を『模本集成』に探すと、渡邊華山旧蔵「全楽堂本」に近い。全楽堂本は⑱⑰⑯で始まり、以下は市島本と同じである。

「全楽堂本」について『模本集成』は以下のように解説する。

本巻の料紙は幅31cm～32cmで一定しており、紙継ぎ目を挟んで連続する図や言葉書きもあり、図の順序も3長澤伴雄本と基本的に一致するから、先のような図の順序が単なる偶然の結果とは考えにくい。巻末に土佐光貞の鑑定書が写されていないことや、旧蔵者本田忠憲の生存年代を考慮すると、これが寛政8（1796）年以前、⑱⑲を逸する前の原本の姿である可能性も少なくないであろう。そう考えれば本巻は関戸家本の古態を伝える貴重な模本であり、3長澤伴雄本は、寛政8年の改変を経た後も、天保末年までは大筋で古い姿が保たれていたことを示す資料となる。国会図書館所蔵の病草紙模本（略）も本巻と全く同じ順序で、土佐光貞の鑑定書を伴っていないのは、その傍証といえよう。⁵⁰

また、大館氏と光貞の交換について、加須屋は以下のように述べ、国会本をその例として挙げている。

（土佐光貞はこの時内裏造宮に関わっていた）当時の宮廷画壇のトップが入手したことから、「病草紙」はこの時期を境にしてにわかに他の絵師たちにも注目され始めた。美術的興味と医術的興味、それにおそらく十九世紀という時代が求めた怪奇趣味あるいは差別意識が相俟って、これ以降、幕末から明治・大正期にかけて「病草紙」は転写が繰り返されることになった⁵¹。

市島本は、国会本と同じ奥書を持つ全く同じ系統の本である。したがって、当館本は、「病草紙」古態を伝えるものであり、19世紀の「病草紙」の流行を踏まえて制作されたといえよう。

46 加須屋誠。“総論「病草紙」”。病草紙。加須屋誠、山本聡美編。中央公論美術出版、2017.5, p87-172。

47 京都国立博物館。病草紙（やまいのそうし）。<https://www.kyohaku.go.jp/syuzou/meihin/emaki/item04.html>（参照：2019.1.8）

48 武田科学振興財団杏雨書屋編。杏雨書屋所蔵病草紙模本集成。武田科学振興財団、2017, 310p。所蔵する「病草紙」模本のうち8点について、図版を掲載し、解説している。

49 同資料46, p109。

50 同資料48, P303。「本巻と全く同じ順序」とあるが、国会本も⑱⑲⑯の並び順で始まっていることは、資料39で確認できる。

51 同資料46, p109。

4. 藤浪剛一から山形先生への贈与

伝来と史料的位置づけを確認したところで、昭和14(1939)年の藤浪剛一から山形先生への贈与を考えた。石井記事も述べているように、昭和11(1936)年4月、山形先生は医学部を卒業し、山川第三内科に入局した。昭和14年では26歳の副手であった。一方、藤浪は60歳。どのような交感がこの贈り物となったのか。藤浪と東北大学との関わりを見ていきたい。

藤浪剛一から山形先生への贈り物はどのように行われたのか。まさにこのことについて、山形先生自身が語っていた。少し長いが引用する。

藤浪先生が医史学講義に来仙された昭和十四年十一月五日絵巻物と古医書の展覧会を開いたが、私も郷土医家の医籍若干を出品し、その中に伏見医員大橋主水政房が天保四年より八年にかけて筆写した高野長英の「居家備用」一〇巻を出品した。これは前年四月京都の学会の際古書肆より購入したもので、虫損じ多く、一〇冊で一円であったが、仙台に於いて一枚一枚裏打ちをして製本し直したら、九円もとられた日く付きのものであった。

私は何気なくその話を藤浪先生に申し上げたのであるが、その翌週の講義終了日に藤浪先生は私に、「異疾草紙」一帖を贈られた。

(中略：藤浪の識語、雨宮氏蔵書印文が引かれる)

此の事に関連して藤浪先生は、書籍は愛書家より愛書家に伝わるべきものであるとの見解を披歴されたのであった。

これは、昭和17(1942)年11月29日に亡くなった藤浪の追悼録に寄せられた文章であった(以下「追悼録」)⁵²。山形先生は、「講義終了後はいつも青木大輔博士やその他の会員などと先生の宿舎である駅前仙台ホテルに出掛けて夜が更ける迄医史学上の質疑をしたり、いろいろ指導に預かつ⁵³」ていたのである。

昭和12(1937)年9月、山形先生が所属した第三内科

の山川章太郎(1884-1941)教授は、小関三英(天明7-天保10, 1787-1839)⁵⁴の手紙約40通を購入した。その整理を山形先生と一緒に入局した大久保謙一が担当した。その成果は、「文化」昭和13(1938)年3月-8月号まで6回にわたり、山川章太郎「小関三英とその書簡」として発表され、そのまま日本医史学会「中外医事新報」1258-1271に転載された。それまで小関三英は仙台には来ていないということが定説とされていたが、この研究により、文政6(1823)年10月、仙台藩医学校蘭方内科教授として着任したことが明らかになった。追悼録中の「前年四月京都の学会」は、この書簡の整理について「書翰を通じて観たる小関三英」の報告を大久保と行った、第10回日本医学会第一分科会日本医史学会総会であろう。藤浪はこの会の座長であった⁵⁵。

私は、山川先生の仕事を手伝いながら、洋学がどのような経路で日本に伝来してきたか、洋学者がどのように苦勞してそれらを体系づけていったか、また仙台にはどのような経路で普及したかということがだんだんわかってきた。しかし、私がつとも啓発されたのは、資料をどのように吟味し、また文献をどのように扱うか、さらに文章を書くにはどのようなところに重点をおくべきか、などがわかったことである⁵⁶。

小関三英の仕事を通して、山形先生は医史学への興味を強くし、その後も継続されたのではなかったか。

昭和14年11月の展示会について当館青木コレクション⁵⁷に医史学同好会主催「醫史學展覧會出品目録」が残っている。目録によれば、出品者と出品点数は、表1のとおり。藤浪剛一は74点、山形先生は個人では最多の17点を出品している。山形先生がこれだけの資料を出品していることは驚きであった。昭和10(1935)年には、医史学同好会の会員であることが確認できる⁵⁸ので、4年ほどの間に収集したものであろうか。

52 “藤浪剛一先生”。山形徹一。随筆集芝蘭集。尚仁会、1976, p291-295.

53 同資料 52.

54 蘭学者。出羽出身。蛮社の獄に際し、自害した。

55 同資料 52.

56 “小関三英の手紙”。山形徹一。随筆集芝蘭集。尚仁会、1976, p365-368.

57 青木大輔は医史学同好会の中心メンバーであった。青木旧蔵の青木コレクションは当館ホームページで、一部目録を公開している。<http://www.library.med.tohoku.ac.jp/d-lib/aoki/kaidai.html> (参照:2019.1.8)

58 醫史學同好会パンフレット。13, 仙臺藩醫史資料其十一。1938. 3. 昭和10年開催の展示会の出品者のあとに会員名簿があるので、昭和10年の会員と考える。

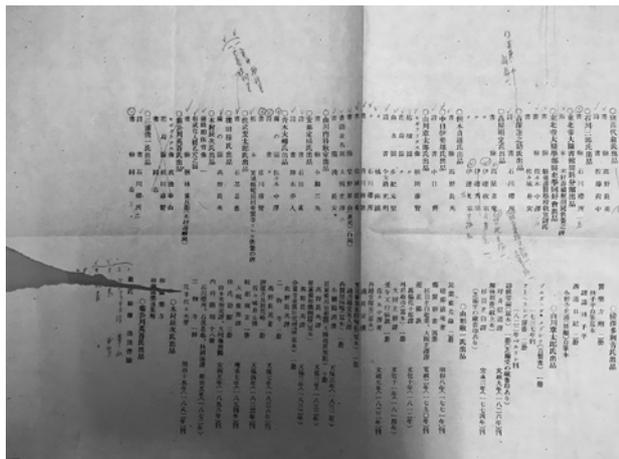


図14 医史学展覧会出品目録(「山形敏一氏出品」部分)

藤浪氏出品の資料を、『杏雨書屋蔵書目録』に探すと、書名からのみであるが、「絵巻物」を除き、ほとんどを確認することができる。「絵巻物」に「疾の草紙」がみえるが、市島本は絵巻物ではないので、別本であろう。現在の杏雨書屋には乾々齋書屋由来の「病草紙」は3種所蔵⁵⁹しており、そのいずれかの可能性がある。

山形先生の出品資料と山形名誉教授寄贈資料43点と照合した。山形名誉教授寄贈資料は、市島本とは別に、平成11年よりあとに寄贈されたものであるが、3点しか合致しなかった。合致したうちの2点は「居家備用治術篇・薬剤篇」写本であるが、追悼録の記述と状態が一致しないので別本であろう。仙台文学館に所蔵されている山形氏寄贈本を特別に見せていただいたが、当館所蔵を補完する1点ともう1点としか確認できなかった。

同じく昭和14年には、温泉学の方面でも藤浪と山形先生の交流があった。東北温泉協会からの委嘱により、山形先生は花巻温泉の研究をしている。そのエピソードのなかで藤浪を以下のように紹介している。

山川先生に温泉を依頼されたのは藤浪剛一先生という、慶応大学の放射線科の教授でありまして、この方は温泉もやっておられたし、医史学もやっておられました。私の医史学の方の先生であります⁶⁰。

『異疾草紙』は「医史学の方の先生」を言わしめるだけの交流の象徴であった。また、雨宮氏蔵書印文に

出品者	出品点数
藤浪剛一	74
内訳 絵巻物(病に関するもの)	9
自筆畫籍	19
古版醫書及古醫書	16
方書	8
図譜	10
一般代表的醫書(明和以降)	12
在仙諸家出品 書畫之部	
猪苗代翁	2
石川三郎	1
東北帝大圖書館醫科分館	1
東北帝大醫學部醫史學同好會	3
吉澤運之助	1
高屋明定	4
但木貞雄	1
中日伊勢雄	1
山川章太郎	12
山川内科教室	1
安部定橘	2
青木大輔	4
佐武安太郎	1
櫻田穆	1
木村辰次郎	3
三浦俊一	2
醫書の部	
東北帝大圖書館	11
東北帝大醫學部圖書分館	9
東北帝大醫學部醫史學同好會	21
大久保謙一	4
横澤多利吉	2
山川章太郎	4
山形敏一	17
木村辰次	2
亀掛川英吾	4

表1 昭和14年醫史学展覧会出展者と出品点数

59 武田科学振興財團杏雨書屋編、杏雨書屋蔵書目録、武田科学振興財團杏雨書屋、臨川書店(発売)、1982.6.

60 “山形教授挨拶”. 山形教授への感謝の集い(昭和51.6.7). 尚仁会誌. 1977, 29, 山形教授退官記念特集, p109-112.

みる愛書の精神はこれまで取書をしてきた藤浪、取書
を始めたばかりの山形先生双方に感ずるものであった
であろう。

5. 医史学講義と医史学同好会

昭和7年に結成された「医史学同好会は、数ある部
活の中で最も堅実な地味なサークルだった」と吉田は
言う（以下「吉田記事」）⁶¹。山形先生は、昭和12年
には医史学同好会幹事であった⁶²。

石井記事や、吉田記事は、市島本贈呈の期となった
昭和14年講演会について医史学同好会の活動として紹
介しているが、追悼録で山形先生は、医史学講演会に
ついて「医史学が東北帝大医学部学則には特殊講義と
して規定されているが、これが初めて実現したのは昭
和6年であった⁶³。」と述べている。つまり医史学講義
はカリキュラムの一環であったようだ。また、大久保
謙一は医史学講義について、「わたしも富士川先生の講
義をきいて当時の学内の雰囲気にも染まっていたので、
卒業の年に、夏季休暇中の調査結果を、「讃岐の名医、
合田強と最初の内科紅毛医言」の小文として良陵に載
せた⁶⁴。」と言っており、医史学講演会によって、学内
に医史学への興味関心が高まっていたのであろう。

医史学講義と医史学同好会の講演会が不分明のと
ころもあるが、追悼録の記事は石井記事、吉田記事に
紹介されていない講義を記録しており、ここに主に講
演に関することを年表形式に記録する。参照を付けて
いないものは追悼録にのみ記述がある。

昭和6(1931)年10月 第1回医史学講義：富士川游

昭和6年10月21日 富士川博士を囲む医史学同好会
懇談会

昭和7(1932)年5月14日 東北帝大医史学同好会発
会式

会長佐武安太郎⁶⁵

昭和8(1933)年10月 第2回医史学講義

富士川游「日本医学の変遷」

昭和8年10月7-8日 医学史資料展覧会⁶⁶

・醫學史同好会目覚しき活躍. 講演, 講座, 展覧会等
去る十月二日以来十四日迄, 醫博文博富士川游氏を
招き, 新西講堂に於て, 醫學史講座を毎日午後四時
より六時まで開き, 長谷部教授, 小川助教授を始め,
多數熱心なる聴衆を集めた。

富士川游「我國醫學史展望」⁶⁷

藤浪剛一「徳川時代の科学者の苦難」⁶⁸

富士川游「東北醫人傳」⁶⁹

昭和10(1935)年6月 仙臺醫史資料展覧會

「仙臺醫史資料展覧會目録並解説」⁷⁰

昭和10年 第3回医史学講義富士川游

・昨年11月富士川游博士来仙に際して, 医史学同好
会では同博士の講演会を公開し「シーボルト先生」
と題する博士の講演を拝聴しました⁷¹。

昭和12年 第4回医史学講義

藤浪剛一「西洋医学の発達」

・藤浪先生が本学医学部の医史学講義を担当されたの
はこれが最初

昭和14(1939)年10月 第5回医史学講義

藤浪剛一「医師の地位の変遷」

「徳川時代の洋学」

「絵巻物に現はれたる疾病」

昭和14年11月5日 医学史資料展覧會

・医事に関係ある絵巻物を主とした展覧會
・有数の權威者藤浪博士の御好意による。我等と直接
的に結び付き, 氏等を知る最も良き契機を與えられ

61 吉田秀一。「医史学同好会」。良陵同窓会百二十年史編纂委員会編。良陵同窓会百二十年史。東北大学良陵同窓会。1998, p986-987.

62 同資料56.

63 同資料52.

64 大久保謙一。昭和十一-十六年のころ。同資料60, p195-197.

65 同資料61.

66 良陵。1933.10.28, 21, p7.

67 良陵。1933.12.20, 22, p16-17.

68 良陵。1934.5.15, 25, p9-11. 資料66の講演会紹介記事では「明治時代に於ける我科学者の苦難」と紹介されているが恐らく誤植

69 同資料66, p11.

70 同資料58.

71 医史学同好会。シーボルトについて。良陵。1936.6.13, 37, p22-23.

て感謝に堪はず⁷²。

昭和15年11月2日 特別講演

藤浪剛一「江戸時代の解剖」⁷³

- ・ 医史学講義は隔年ごとに設けられて居ったので、私は特別に藤浪先生にお願いして(略)特別講演を聴かせていただいた。医学部良陵会学芸部主催の形をとったが、謝礼を悉く我が医学史同好会に寄贈された。
- ・ 「江戸時代の解剖」は慶大教授藤浪教授の御好意に依るもので、先般学芸部主催による医史学講演会の抜粋で、大方の興をそそりまた啓発するものがあると信じます⁷⁴。

昭和16年9月 第6回医史学講義

藤浪剛一「日本医学の発達」

- ・ 先生の講義は例年一週一回月曜午後四時からであったので、日曜一日や月曜の午前中はわたしらのいつも行く書肆の名など聞かれて出かけられた。

昭和17年11月第7回医史学講義

山形徹一「日本医学の発達とその特質」^{75 76}

石井記事では、市島本の贈呈を「徳川時代の科学者の苦難」講演の前後であろう、としているが、上により、「徳川時代の…」は昭和8年の講演であり、昭和14年の藤浪講演のいずれか、山形先生が記述された順番通りに講義が毎週おこなわれたのであれば「絵巻物に現はれたる疾病」のあと、まさに疾病の絵巻物『異疾草紙』が贈られたということになろう。

6. 結論

山形徹一名誉教授から当館へ寄贈された、市島春城旧蔵『異疾草紙』について、来歴と「病草紙」摸本としての位置づけを検討した。

「忠房」によって弘化4年に制作された摸本は、雨宮中平、市島春城、藤浪剛一が所蔵していた。藤浪から山形先生への昭和14年の寄贈は、2人の師弟関係を象徴するものといえよう。藤浪は医史学講義のため来仙していた。また背景として、医史学講義による学

内の医史学への関心の高まりがあったと言えよう。

弘化4年に「忠房」が摸本を作成したのは、寛政8年土佐光貞が大館高門所蔵の「病草紙」を入手したことに端を発する、一種の流行であると考えられる。また画面の順番から、寛政8年以前の古い状態を残したものと見える。

当館では、市島本を平成29年度末に貴重書に指定し、永く保存し、調査研究に役立てることとしている。

謝辞

この調査研究は、平成30年度東北大学附属図書館研究振興プログラムの助成を受けた。助成金では国立国会図書館・江川文庫での資料調査、および市島本の撮影を行った。市島本の画像データは、当館ホームページ⁷⁷で公開する予定である。

調査では、沢山の皆様にご協力をいただいた。仙台文学館赤間亜生様、江川文庫橋本敬之様、伊豆の国市中

央図書館郷土資料室小林幸枝様、姫路城管理事務所様、岸博実様、雨宮様、お名前を挙げて、御礼申し上げます。

また、資料調査中の日常業務、ILLや資料搬送など、館内のみなさんの協力なくしてはできなかつたことで、この場を借りて感謝申し上げます。

(わたなべ あいこ、附属図書館医学分館整理係長)

72 良陵. 1940. 1. 15, 50, p201.

73 良陵. 1940. 12. 25, 53. p2-5.

74 同資料73, p117.

75 良陵. 1943. 8. 10, 59, p22-53.

76 良陵. 1944. 5. 5, 60, p50-91.

77 東北大学附属図書館医学分館. 医学関係貴重資料. <http://www.library.med.tohoku.ac.jp/d-lib/d-lib.html> (参照: 2019. 1. 8)